



東日本大震災の心理的影響に関する研究Ⅲ : 被災地 高校生の学習意欲および進路意識

齊藤, 誠一
則定, 百合子
岡本, 英生
松木, 太郎

(Citation)

神戸大学都市安全研究センター研究報告, 21:299-305

(Issue Date)

2017-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011559>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011559>



東日本大震災の心理的影響に関する研究Ⅲ —被災地高校生の学習意欲および進路意識—

A study on psychological effects of the Great East Japan Earthquake III:
Academic motivation and career path consciousness in senior high school
students in disaster area

齊藤 誠一¹⁾

Seichi Saito

則定百合子²⁾

Yuriko Norisada

岡本 英生³⁾

Hideo Okamoto

松木 太郎⁴⁾

Taro Matsuki

概要

本研究では、福島県中通り地方にある高校に在学している生徒を対象に、進路決定変数とその関連変数意識から検討することを目的とした。調査対象者は、福島県中通り地方に所在する公立高校の1年生から3年生の生徒559名であった。分析の結果、学年が上がるほど進路希望に対する迷いが減少し、学習意欲や進路意識が上昇するといった一般的な高校生が示す傾向と同様であったが、低線量被爆の恐れを感じざるを得ない、それにもかかわらずそれに対して有効な対処を持ち得ない環境にあつては、問題焦点型コーピングだけでは必ずしも効果的には機能せず、日々生じている不安などに対する情動焦点型コーピングが機能することで、学習意欲や進路意識を高め、望ましい進路決定を促すことが示唆された。

1. 問題と目的

我々は、複合的な被害を受けている福島県居住者を中心に、震災の心理的影響を検討してきた(齊藤・岡本・則定・松木, 2016; 齊藤・則定・岡本・松木, 2016)。とりわけ福島第一原発の直接的な被害は小さかったものの、福島県中通り地方では空間線量率がやや高く、住民の多くは低線量被爆の不安を長期にわたって有してきた。

他方、進路に多様な選択を有する高校生にとっては、こうした環境の中で生活していることが進路決定にも何らかの影響をもたらすことが推測される。本研究は、福島県中通り地方にある高校に在学している生徒の進路決定について、進路決定変数とその関連変数意識から検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者 福島県中通り地方に所在する公立高校の1年生から3年生の生徒559名(男子171名, 女子388名, 平均年齢16.75歳, $SD = .92$)。

調査手続きと倫理的配慮 2013年12月に、無記名式の質問紙法による調査の実施を、校長の了承を得た上で、校長を通して各学級担任に依頼して行った。回答にあたって、プライバシーは保護されること、回答しないことにより不利益を被らないこと、いつでも中止可能なことなどを紙面上において教示した。

調査内容

進路決定変数

①**希望している進路** 希望している進路について、「福島県内で進学」「福島県外で進学」「福島県内で就職」「福島県外で就職」「どのような進路にするか迷っている」「その他」から1つ選択を求めた。

②**進路決定において重視すること** 進路決定において、「親の希望にあっているかどうか」「自分のしたい仕事や勉強であるかどうか」「親元をはなれて一人暮らしになるかどうか」「その仕事や勉強が自分の適性や能力にあっているかどうか」「その仕事が社会に役立つかどうか、あるいはその勉強をして将来社会に役立つ仕事につけるかどうか」を、どの程度重視しているかについて、「まったく重要でない(1点)」から「とても重要である(5点)」の5件法で回答を求めた。

進路決定関連変数

③**学習意欲・進路意識** 内藤・浅川・高橋・古川・小泉(1987)から、学習意欲6項目(「私は勉強に積極的である」など)、進路意識6項目(「私は、自分の進路のことを真剣に考えている」など)の計12項目を用いた。「まったくあてはまらない(1点)」から「まったくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

④**ストレス・コーピング** 尾崎(1993)から、問題焦点型コーピング5項目(「現在の状況を変えるよう努力する」など)、回避・逃避型コーピング6項目(「先のことをあまり考えないようにする」など)、情動焦点型コーピング3項目(「自分で自分をはげます」など)の計14項目を用いた。「まったくしない(1点)」から「いつもする(4点)」の4件法で回答を求めた。

⑤**独立意識** 加藤(1980)から、独立性10項目(「自分自身の判断に責任をもって行動することができる」など)、親への依存性5項目(「親といるだけでなんとなく安心できる」など)、反抗・内的混乱5項目(「両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない」など)の計20項目を用いた。「まったくあてはまらない(1点)」から「まったくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

⑥**自尊感情** 桜井(2000)から、自尊感情10項目(「私は、たいいていの人がやれる程度には物事ができる」など)を用いた。「違う(1点)」から「そう思う(4点)」の4件法で回答を求めた。

3. 結果

(1) 基礎的分析

希望している進路について (Table 1)

1年生女子、2年生男女では「福島県外で進学」希望が最も多く、「福島県内で進学」希望、「どのような進路にするか迷っている」がこれに続いているが、1年生男子は「どのような進路にするか迷っている」が最も多くなっている。また、3年生では約4割の者の進路が決定しており、残余の者では「福島県外で進学」希望、「福島県内で進学」希望が多かった。

Table 1 学年・性別の希望している進路

	高校1年		高校2年		高校3年	
	男子 (%) (n = 58)	女子 (%) (n = 113)	男子 (n = 58)	女子 (n = 148)	男子 (n = 55)	女子 (n = 127)
福島県内で進学	11 (19.0)	21 (18.6)	9 (15.5)	22 (14.9)	9 (16.4)	22 (17.3)
福島県外で進学	17 (29.3)	44 (38.9)	36 (62.1)	84 (56.8)	19 (34.5)	41 (32.3)
福島県内で就職	5 (8.6)	18 (15.9)	3 (5.2)	20 (13.5)	4 (7.3)	6 (4.7)
福島県外で就職	4 (6.9)	4 (3.5)	0 (0.0)	4 (2.7)	0 (0.0)	2 (1.6)
どのような進路にするか迷っている	21 (36.2)	19 (16.8)	8 (13.8)	18 (12.2)	1 (1.8)	2 (1.6)
その他	0 (0.0)	7 (6.2)	1 (1.7)	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (0.8)
無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)	0 (0.0)	21 (38.2)	53 (41.7)

注) 高校3年の無回答は進路決定済みの者である。

進路決定において重視することについて (Table 2)

「親の希望にあっているかどうか」では、学年の有意な主効果が認められ、3年生が1年生よりも得点が高かった。また、性の有意な主効果も認められ、女子が男子よりも得点が高かった。また、「自分のしたい仕事や勉強であるかどうか」では、学年と性の交互作用が認められ、3年生では女子が男子よりも得点が高く、女子では3年生が2年生よりも得点が高かった。さらに、「その仕事や勉強が自分の適性や能力にあっているかどうか」「その仕事が

社会に役立つかどうか、あるいはその勉強をして将来社会に役立つ仕事につけるかどうか」では、それぞれ性の有意な主効果が認められ、いずれも女子が男子よりも得点が高かった。他方、「親元をはなれて一人暮らしになるかどうか」では得点差が認められなかった。

Table 2 進路決定において重視することの学年・性別の平均値(SD)および分散分析結果

	高校1年		高校2年		高校3年		F値(自由度)
	男子 (n = 58)	女子 (n = 113)	男子 (n = 58)	女子 (n = 148)	男子 (n = 55)	女子 (n = 127)	
親の希望にあっているかどうか	2.22	2.58	2.53	2.70	2.78	2.95	学年 6.85 (2/553) *
	(.94)	(1.03)	(1.17)	(1.01)	(1.26)	(1.21)	性 5.22 (1/553) *
							交互作用 0.41 (2/553)
自分のしたい仕事や勉強であるかどうか	4.16	4.35	4.38	4.24	4.27	4.58	学年 1.86 (2/553)
	(.93)	(.69)	(.75)	(.84)	(.95)	(.75)	性 2.48 (1/553)
							交互作用 3.35 (2/553) *
親元をはなれて一人暮らしになるかどうか	2.91	3.09	3.33	3.12	3.18	3.03	学年 1.66 (2/553)
	(1.01)	(1.09)	(1.08)	(1.08)	(1.14)	(1.15)	性 .36 (1/553)
							交互作用 1.37 (2/553)
その仕事や勉強が自分の適性や能力にあっているかどうか	3.83	4.21	3.98	4.12	4.11	4.23	学年 1.48 (2/553)
	(.99)	(.76)	(.89)	(.80)	(.88)	(.68)	性 8.19 (1/553) *
							交互作用 1.34 (2/553)
その仕事が社会に役立つかどうか、あるいはその勉強をして将来社会に役立つ仕事につけるかどうか	3.60	3.74	3.72	3.93	3.73	4.06	学年 2.20 (2/553)
	(1.04)	(.94)	(.87)	(.83)	(1.13)	(.94)	性 6.83 (1/553) *
							交互作用 .40 (2/553)

* $p < .05$, ** $p < .01$

学習意欲(Table 3)

学年と性の有意な交互作用が認められ、高校3年では、女子の方が男子よりも得点が高かった。

進路意識(Table 3)

学年の有意な主効果が認められ、3年生が1年生、2年生より得点が高かった。

ストレス・コーピング(Table 3)

問題焦点型コーピング、回避・逃避型コーピング、情動焦点型コーピングいずれでも、学年および性の有意な主効果、交互作用は認められなかった。

独立意識(Table 3)

独立性では、学年の有意な主効果が認められ、3年生が2年生より得点が高かった。また、親への依存性では、性の有意な主効果が認められ、女子の方が男子よりも得点が高かった。さらに、反抗・内的混乱では、学年の有意な主効果が認められ、1年生が2年生より得点が高く、性の有意な主効果も認められ、男子が女子より得点が高かった。

自尊感情(Table 3)

性の有意な主効果が認められ、男子の方が女子よりも得点が高かった。

(2) 相関分析(Table 4)

進路決定変数間では学習意識と進路意識が中程度の正の有意な相関を示し、進路決定関連変数間では情動焦点型コーピングと独立性、自尊心と順に中程度、弱い正の有意な相関、独立性と自尊心が中程度の正の有意な相関を示した。また、進路決定変数と進路決定関連変数の関連では、学習意欲は情動焦点型コーピング、独立性、自尊感情と弱い有意な正の相関を示し、進路意識は独立性と中程度の有意な正の相関を示した。

(3) 県内で進学・就職する者と県外で進学・就職する者の比較(Table 5)

その結果、問題焦点型コーピングと親への依存性で有意な得点差が認められ、いずれも県内で進学・就職するの方が県外で進学・就職する者よりそれぞれの得点が高かった。

Table 3 進路決定関連変数の学年・性別の平均値(SD)および分散分析結果

	高校1年		高校2年		高校3年			F値(自由度)	
	男子 (n = 58)	女子 (n = 113)	男子 (n = 58)	女子 (n = 148)	男子 (n = 55)	女子 (n = 127)			
学習意欲 (1~5点)	2.40	2.41	2.52	2.35	2.86	3.09	学年	32.17 (2/553) **	
	(0.64)	(0.64)	(0.74)	(0.70)	(0.76)	(0.75)	性	.16 (1/553)	
							交互作用	3.27 (2/553) *	
進路意識 (1~5点)	2.96	3.09	2.98	3.05	3.66	3.90	学年	40.97 (2/553) **	
	(1.02)	(0.92)	(0.71)	(0.88)	(0.79)	(0.79)	性	3.47 (1/553)	
							交互作用	.42 (2/553)	
ストレス・ コーピング	問題焦点型 コーピング (1~4点)	2.47	2.52	2.58	2.61	2.64	2.63	学年	2.68 (2/553)
		(0.60)	(0.47)	(0.56)	(0.55)	(0.60)	(0.55)	性	.20 (1/553)
								交互作用	.15 (2/553)
	回避・逃避型 コーピング (1~4点)	2.50	2.56	2.64	2.53	2.69	2.60	学年	1.86 (2/553)
		(0.56)	(0.49)	(0.53)	(0.52)	(0.53)	(0.52)	性	.89 (1/553)
								交互作用	1.25 (2/553)
	情動焦点型 コーピング (1~4点)	2.55	2.56	2.49	2.62	2.56	2.72	学年	.78 (2/553)
		(0.74)	(0.68)	(0.66)	(0.67)	(0.75)	(0.69)	性	2.53 (1/553)
								交互作用	.44 (2/553)
独立意識	独立性 (1~5点)	3.18	3.18	3.09	3.08	3.30	3.29	学年	4.99 (2/553) **
		(0.52)	(0.55)	(0.50)	(0.57)	(0.58)	(0.70)	性	.02 (1/553)
								交互作用	.01 (2/553)
	親への依存性 (1~5点)	2.77	3.22	2.88	3.19	2.93	3.16	学年	.18 (2/553)
		(0.70)	(0.78)	(0.66)	(0.78)	(0.73)	(0.89)	性	20.86 (1/553) **
								交互作用	.73 (2/553)
	反抗・内的混乱 (1~5点)	2.84	2.72	2.81	2.69	2.67	2.50	学年	4.30 (2/553) *
		(0.60)	(0.61)	(0.61)	(0.62)	(0.70)	(0.68)	性	5.35 (1/553) *
								交互作用	.09 (2/553)
自尊感情 (1~4点)	2.34	2.27	2.31	2.17	2.42	2.28	学年	1.94 (2/553)	
	(0.46)	(0.41)	(0.45)	(0.48)	(0.51)	(0.54)	性	7.05 (1/553) *	
							交互作用	.24 (2/553)	

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 4 進路決定関連変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 学習意欲								
2 進路意識	.58 **							
3 問題焦点型コーピング	.21 **	.23 **						
4 回避・逃避型コーピング	.07	.05	.19 **					
5 情動焦点型コーピング	.32 **	.29 **	.44 **	.34 **				
6 独立性	.33 **	.56 **	.19 **	.11 **	.41 **			
7 親への依存性	.16 **	.12 **	.17 **	.09 *	.28 **	.13 **		
8 反抗・内的混乱	-.14 **	-.26 **	.05	.01	-.08	-.31 **	-.10 *	
9 自尊感情	.30 **	.29 **	.09 *	.11 **	.31 **	.58 **	.13 **	-.23 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

(4) 重回帰分析(Table 6)

学習意欲および進路意識に影響を及ぼす要因を検討するため、ストレス・コーピング、独立意識、自尊感情を説明変数、学習意欲および進路意識を目的変数とし、説明変数の選択にステップワイズ法($p < .05$)を用いた重回帰分析を行った。その結果、学習意欲では、情動焦点型コーピング、独立性、自尊感情、問題焦点型コーピングが説明変数として選択され、それぞれ有意な正の標準偏回帰係数を示した。進路意識では、独立性、問題焦点型コーピング、反抗・内的混乱が説明変数として選択され、独立性、問題焦点型コーピングは有意な正の標準偏回帰係数を示し、反抗・内的混乱は有意な負の標準偏回帰係数を示した。

Table 5 進路決定関連変数のt検定結果

	県内進学・就職	県外進学・就職	t	
学習意欲	2.70 (.75)	2.60 (.79)	1.21	
進路意識	3.30 (.88)	3.37 (.89)	- .78	
ストレス・ コーピング	問題焦点型コーピング	2.67 (.51)	2.54 (.56)	2.41 *
	回避・逃避型コーピング	2.53 (.49)	2.55 (.55)	- .48
	情動焦点型コーピング	2.64 (.64)	2.59 (.70)	.65
独立意識	独立性	3.14 (.56)	3.20 (.58)	-1.03
	親への依存性	3.26 (.83)	2.97 (.77)	3.48 **
	反抗・内的混乱	2.65 (.61)	2.66 (.63)	- .08
	自尊感情	2.23 (.41)	2.27 (.51)	- .85

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6 重回帰分析(ステップワイズ法)結果

	学習意欲	進路意識	
ストレス・ コーピング	問題焦点型コーピング	.10 *	.15 **
	回避・逃避型コーピング	—	—
	情動焦点型コーピング	.17 **	—
自立心	独立性	.15 **	.50 **
	親への依存性	—	—
	反抗・内的混乱	—	-.11 **
	自尊感情	.15 **	—
説明率(R^2)	.16 **	.34 **	

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考 察

本研究は、福島県中通り地方にある高校に在学している生徒を対象に、①どのような進路を希望しているのか、②進路決定においてどのようなことを重視しているのか、③彼らの学習意欲および進路意識に関連する変数はどのようなものかについて検討した。全体的には、学年が上がるほど進路希望に対する迷いが減少し、学習意欲や進路意識が上昇するといった一般的な高校生は示す傾向と同様であったが、ストレス・コーピングの観点から検討した時、特徴的な傾向が示された。

ストレス・コーピングの3つの下位尺度とも、いずれの学年と性でも尺度中間値の2.5前後を示し、有意差は見られず、中程度のストレス・コーピングを有していると思われた。しかしながら、他の進路決定変数との関連を見ると、問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングが学習意欲、進路意識、独立性、親への依存、自尊感情と弱いもしくは中程度の正の相関を示していた。このことは、この地域特有の低線量被爆の恐れというストレスサーに対しては、それに対処して取り除くという問題焦点型コーピングや、この地域から避難して、ストレスサーから遠ざかるという回避・逃避型コーピングだけは対処がむずかしいことから、こうした恐れやこれから派生する不安などに対する情動焦点型コーピングが現実的であると考えられる。この点で、ストレスサーに対して本質的に対処せず、その場限りでしか有効ではないと考えられがちであった情動焦点型コーピングが、終息が見えない原発被害というストレスサーに対しては、直接的に問題に対処できずストレスを減じられないよりも、現在の情動をコントロールすることでストレスを低下させる方が有効な効果を持つといえよう。他方、独立心と親への依存性いずれとも正の相関をもつといった一見矛盾した結果とも見られるが、情動焦点型コーピングには情動をコントロールするためのサポート資源も必要であり、このことが親への依存性を高めていると推測できる。さらに、重回帰分析の結果からも学習意欲には問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングが、進路意識には問題焦点型コーピングが有意な貢献を示している。後者については、独立心と問題焦点型コーピングとの相関が高いために、問題焦点型コーピングに有意な貢献が示されなかったと思われる。

以上のことから、低線量被爆の恐れを感じざるを得ない、それにもかかわらずそれに対して有効な対処を持ち得ない環境にあつては、問題焦点型コーピングだけでは必ずしも効果的には機能せず、日々生じている不安などに対する情動焦点型コーピングが機能することで、学習意欲や進路意識を高め、望ましい進路決定を促すものと

考えられる。

引用文献

- 加藤 隆勝(1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 内藤 勇次・浅川 潔司・高橋 克義・古川 雅文・小泉 令三(1987). 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145.
- 尾関 友佳子(1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクション的な分析に向けて—久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 齊藤 誠一・岡本 英生・則定 百合子・松木 太郎(2016). 東日本大震災の心理的影響に関する研究Ⅰ—2年後調査報告— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10, 87-92.
- 齊藤 誠一・則定 百合子・岡本 英生・松木 太郎(2016). 東日本大震災の心理的影響に関する研究Ⅱ—自由記述に見る被災者の心理的特徴— 神戸大学都市安全研究センター研究報告, 20, 229-235.
- 桜井 茂男(2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.

謝辞：本研究は、平成25年度東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動の助成を受けた。

著者

- 1) 齊藤誠一, 人間発達環境学研究科, 准教授
- 2) 則定百合子, 和歌山大学教育学部, 准教授
- 3) 岡本英生, 奈良女子大学研究院生活環境科学系, 教授
- 4) 松木太郎, 人間発達環境学研究科, 学生

A study on psychological effects of the Great East Japan Earthquake III: Academic motivation and career path consciousness in senior high school students in disaster area

Seichi Saito
Yuriko Norisada
Hideo Okamoto
Taro Matsuki

Abstract

The purpose of this study was to research the psychological effects of the experience of the Great East Japan Earthquake in 2011. In this study, we researched how high school students who live in Nakadori area decide one's course in life. The result showed that the distinct characteristic of subjects is not found in deciding one's course in life. However, problem-focused coping and emotion-focused coping were related to academic motivation, an idea of their future career path, independence of parents, dependence of parents, and self-esteem. To cope with stressful physical and psychological environment, not only problem-focused coping but also emotion-focused coping was needed, and would promote to deciding one's course in life.

©2017 Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University, All rights reserved.